

津波被災地のコミュニティガーデンにおける住民等による空間管理の可能性の検討

A study on the land use management by residents through the community garden after the Tsunami stricken area

秋田 典子*

Noriko AKITA

Abstract: This study aims to examine the possibility of the land use management by residents through the community garden after the Tsunami stricken area. This study was conducted with Ogatsu community garden as the subject, which locates center of the Ogatsu peninsula, Ishinomaki city, Miyagi Prefecture. Through the analysis of this research, the following feature in Ogatsu community garden was made clear. 1) the collaboration activity and land use management by the residents, specialists and volunteer groups established Ogatsu community garden, 2) the regulations for the land use activities and the spatial scale were adjusting for the community garden, 3) Ogatsu community garden has secured high visibility and transparency of the space and activities, 4) the community garden has various spatial structures and features that made by various subjects, 5) the community garden offer the cooperative place for local residents and visitors. Ogatsu community garden suggests a possibility of the land use management by local residents by creating the node of various activities in the low density area.

Keywords: *Tsunami stricken area, Community garden, Land use management*

キーワード: 津波被災地, コミュニティガーデン, 土地利用管理

1. はじめに

1-1. 研究の背景と目的

少子高齢化や人口減少等の近年の社会状況の変化に伴い、住民の身近な空間では、空家や空地のように管理が不十分な空間を誰がどのように管理するのかといった課題が、自治体レベルでは、都市の基盤を形成するインフラや施設の維持管理コストをどのように縮減するのか、といった課題が生じている。

2011年3月に発生した東日本大震災の復興過程では、こうした課題に対応するために、集約型のコンパクトな空間構築が進められ、人口減少という前提のなかで生活の質をいかに維持するか、まちの賑わいをいかに創出するか等が検討されている。しかし、居住空間の集約は、復興事業の進行と同時に集約拠点となる区域以外のエリアの低密化を生み出す。このため、津波の被害を受けた低平地等では、震災から約5年が経過した現在でも土地利用が定まっていない場所も少なくない¹⁾。このように居住空間の集約により低密化するエリアを今後誰がどのように管理するかということは、津波被災地に限らず今後の人口減少社会に共通する課題になると考えられる。

造園分野においては、地域住民による身近な空間管理活動の蓄積があり、その一部は制度化されてきた。例えば、公園の清掃・美化活動を住民が行う公園愛護会制度、道路や河川敷の清掃・美化活動を住民が行うアドプト制度が代表的なものとして挙げられる²⁾³⁾。これらの制度は、公園や道路といった公共的なオープンスペースの管理行為の一部を自治会や町内会等の地縁型の住民団体を通じて住民が代行する取り組みであり、1980年代から始まっている。1990年代になると、低未利用の空地等を地域住民が花や緑の空間に更新し、住民自身が管理・運営するコミュニティガーデン（以下、CGという）の活動が欧米から導入される⁴⁾。こうした流れのなか、千葉県柏市は2009年に行政の仲介により土地所有者が住民に空地等を貸し出す「カシニワ」という仕組みを採用し、CGを制度化している。渡部(2014)は、カシニワ制度により生成さ

れた「自由広場」と呼ばれるCGが、制度の支援により公共性を獲得しており、地域住民による空間管理に制度が一定の効果を発揮していることを指摘している⁵⁾。

ただし、これらの活動やそれを支える制度は、いずれも一定の人口密度のある市街地に適用されており、住民が減少し、空地が無秩序に発生する状況下における空間管理手法については、現時点では制度・実態の両面で十分な検討が行われていない。

以上を踏まえ本研究では、東日本大震災で津波の被害を受けた低平地において、地元の住民等が中心となり専門家やボランティアの支援を受けて大規模なCGが形成された事例を対象に、CGが生成されたプロセスとCGの管理に関わる主体のCGに対する認識の分析を通じて、土地利用の低密化が進行しているエリアにおける住民等による空間管理の成立要因を、空間特性と運用実態の2つの観点から明らかにし、住民等による空間管理の可能性及び課題について示唆を得ることを目的とする。

1-2. 研究の対象と方法

(1) 研究の対象

はじめに、本研究で対象とするCGを定義する。わが国では、CGの定義や解釈が多様であることから、本研究では越川⁴⁾・平田⁶⁾・秋田⁷⁾によるCGの定義に共通する事項である「まちづくりや地域の活性化等の公共的な目的を持つガーデン活動の場」を対象とし、更に、①住民主体の活動、②協働による空間整備、③空間の公開、という3つの要件を満たすものとした。ただし、津波で被災した低平地には住民が殆どいないため、①については浸水エリアに隣接する非被災エリアの住民や浸水エリアの土地所有者、浸水エリアに居住地や勤務先があった等の地域と一定の繋がりがある場合も住民であると見なした。

東日本大震災の後、コミュニティの再生等を目的として被災地に新設されたCGは少なくない。その多くは仮設住宅等の被災住民の生活空間近傍に設けられており、一部は大規模花壇として津波

*千葉大学大学院園芸学研究科

で被災した低平地でも展開されている⁹⁾。ただし、被災地のCGは支援者やボランティアにより暫定的・単発的に生成されたものが多く、復興事業の進捗によって既に消失したものもあり、その成立過程の把握や資料収集が容易ではない。そこで本研究では、CGの成立経緯について一定の文献・資料が存在し、筆者自身もその生成プロセスに関わった宮城県石巻市雄勝町の「雄勝ローズファクトリーガーデン」(以下、雄勝CGという)を分析の対象とする。

(2) データの収集及び分析方法

データの収集は、2011年7月から2016年2月までに実施した文献調査、現地調査、関係者へのヒアリング及び参与観察により実施した。分析においては、取得したデータを、①活動主体、②ガーデンの空間構成、③土地利用の変化の3つの項目に分け、雄勝CGの空間や運営方式が大きく変化した時期ごとに整理して考察を加えた。また、CGの管理に関わる中心的人物に対するヒアリングから、CGに関わるきっかけや活動のモチベーションを把握した。対象期間は当該地の瓦礫の大部分が撤去され、雄勝CGの活動が始まった2011年8月から2015年9月までとした。

2. 雄勝CGにおける住民等による空間管理の展開

2-1. 雄勝CGの概要

雄勝CGは、宮城県石巻市雄勝町雄勝地区の津波浸水エリアに位置する敷地面積約2,000㎡のCGである。雄勝町は石巻市北西部のリアス式海岸を有する半島部に位置し、震災前の2005年4月に石巻市に合併した。東日本大震災で被災した他の沿岸地域と同様に津波による甚大な被害を受け、震災前の人口約4,300人のうち約3,000人が被災している。町内の被害状況は、死者171人、行方不明者71人、全半壊1,589棟で、雄勝CGが位置する雄勝中心部は壊滅的な被害を受け、震災前に居住していた630世帯のうち590世帯が全壊流出した⁹⁾。

雄勝町は都市計画区域外であるが、町の中心部には総合支所、小中学校、銀行、病院、商店、漁協、B&Gセンター、地場産の雄勝石を使った硯を展示する雄勝硯伝統産業会館等が立地し、まちの機能が集積していた。図1に雄勝CGの位置を示す。現在は周囲の住宅が全て流出、撤去されているため建物が殆どないが、他地区から雄勝町にアクセスする国道398号線と、半島内の各集落を繋ぐ県道192号線の交差点に敷地が位置する。このため雄勝を車で訪れる場合には、必ず雄勝CGが視界に入るといふ立地上の特性がある。現在、この周辺一帯の低平地は災害危険区域に指定され、建築制限が適用されており、復興事業を通じた道路の付け替えも予定されている。2015年9月時点で雄勝中心部において一般の人が立ち寄ることが出来る場所は、雄勝CG以外に仮設商店街、八百屋及び海産物店各1軒のみである。

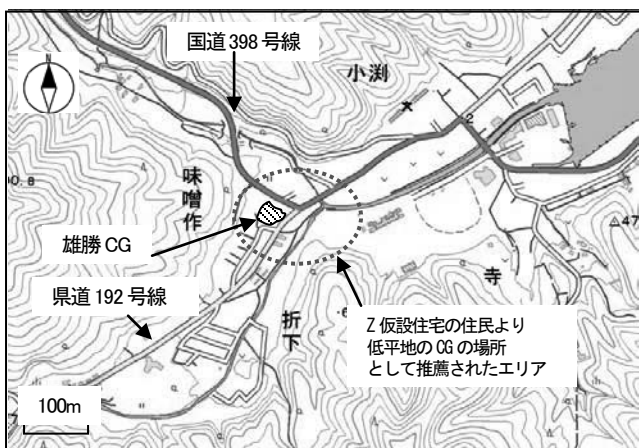


図-1 雄勝CG位置図¹⁰⁾

2-2. 4つの雄勝CGの空間変容期

雄勝CGは、初動期から現在の形態に至るまでにその空間形態が大きく変化している。本研究では、雄勝CGの空間に大幅な変化が生じた以下に示す4つの時期に区切って分析を行う。

第1期は、雄勝CGで活動が始まった震災から5ヶ月後の2011年8月から翌年の2012年2月までであり、当該敷地でCGとしての土地利用の方向性が定まる萌芽期である。大幅な空間の変更はなく、除草や瓦礫収集等の軽微な土地利用が行われ、チューリップ等の簡易な植栽が行われた。第2期は、震災から1年後の2012年3月から翌年の2013年2月までであり、敷地に植栽用の盛土と植栽帯が形成され、ミックスフラワーの種子の播種によりメドウガーデンが展開された。第3期は、震災から2年後の2013年3月から2013年10月までの基盤集中整備期であり、ガーデン周囲の木柵の設置やガーデン内の園路の舗装に加え、ガーデンハウス、トイレ、パーゴラ等の雄勝CGの基盤となる施設が設置された。また、植栽内容もミックスフラワーによるメドウガーデンから、多年草や各種バラによるローズガーデンに変更され、ガーデンのデザインも大幅に変更された。第4期は、2013年11月から2015年9月までであり、植栽の大幅な変化はないが室内作業が可能なプレハブ小屋が建設され、第3期に整備した空間を維持・管理するための運営主体として社団法人が設立される等、運営体制の強化が行われた。また、雄勝CGにおけるアクティビティも植栽だけでなく、防災教育やコミュニティ事業等のソフト面に展開した。

以下では、4つの時期別に、①活動主体、②ガーデンの空間構成、③土地利用の変化を整理し、雄勝CGの発展に伴い、空間特性と運営方式がどのように変化していったのかを明らかにする。

2-3. 雄勝CGの空間特性及び運営方式の実態分析

(1) 萌芽期：2011年8月～2012年2月

①活動主体

雄勝CGの敷地の地権者Aは、震災後の初盆である2011年8月に、雄勝で亡くなった親族を弔うことを目的として敷地内に花を植える作業をはじめた。一方、関東圏の大学の教員と学生有志のグループ(以下、Xという)は、大学の近隣で住民と取り組んでいたCG活動のノウハウを活かした復興支援活動として、石巻市雄勝町の森林公園内に開設され、震災前に主に雄勝町中心部に居住していた高齢者が入居しているZ仮設住宅にて、2011年7月からCG活動に取り組んでいた。Z仮設住宅の入居者は、元の住宅があった低平地を頻繁に見に行っており、そこが手つかずのまま放置されているのを気にかけていた。こうした経緯からXはZ仮設住宅の住民より、仮設住宅だけでなく低平地にもCGを作って欲しいと依頼を受ける。XはZ仮設住宅の住民にCGの適地の提案を受け、2011年9月に当該エリアにて現地調査を行う(図1)。この際に、花植え作業をするAに出会い、Aの花植えの手伝いを申し出て、雄勝のためのCGをつくることを提案する。

この時点で親族を弔いたいという個人的な動機に基づくAと、低平地の空間管理の一形態としてCGの開設を提案したXの活動目的とは必ずしも一致していない。しかし、花植えという手段は共通していることから、AをXが支援して協働で花植えの作業を実施することとなった。

②ガーデンの空間構成

Aは2011年8月より、Xは2011年9月より雄勝CGの敷地内における活動を開始した。ただし、当初は敷地内に残された小規模瓦礫や生活用品の収集、撤去や雑草の除去作業が中心であった。これは被災後に約半年間敷地が放置されていたことや、宅地の耕作が困難であったことに加え、この時点では敷地内に生活用品や庭木等が一部残されていたからである。Xは空間を大きく改変はせず、Aとの協働作業を通じて空間の方向性を判断してゆこうと考えていた。その背景には被災後の緊急時で住民に余裕がないこと、

低平地には住民が殆どいないこと等から、ワークショップによるコンセプトづくり等の CG の通常のプロセスが採用できないこともあった。したがってこの時点で敷地にガーデンの体裁はなく、宅地の敷地の一部が除草・耕作されているという状態であった。X の現地訪問は2,3 か月に1 回程度であり、日常的な除草とホオズキやフウセンカズラ等の簡易な植栽を A が継続して行った。

③土地利用の変化

X は 2011 年 9 月の作業開始時に、ミックスフラワーの種子や肥料を試験的に撒いたが、表面土壌が薄く、敷地の土壌が塩水に浸かっていたことや、遮るものがなくなったことによる強風の影響等から、その後の発芽・成長は殆ど確認できなかった。一方、A も低平地の寂しさを何とかしようと 2011 年秋から植物の提供を呼びかける活動をはじめたところ、花卉業者からチューリップの球根の提供等を受けることができ、その植栽作業を X も支援した。この時期の土地利用の変化は、瓦礫と雑草の除去、敷地の南東側の一部にチューリップ等の植栽を行ったことであり、それ以外の大きな変化はなかった。

(2) メドウガーデン期：2012 年 3 月～2013 年 2 月

①活動主体

A が植物の支援の呼びかけを継続して行った結果、2012 年 1 月に福島・宮城・岩手県の地元新聞社が主催している「スマイルとうほく」プロジェクトを通じて、地元の大手造園会社を中心となり活動している被災地緑化支援ボランティア団体の「花と緑の力で 3.11 プロジェクトみやぎ委員会」（以下、Y という）の協力が得られることになる。Y は A の意向を受けて、雄勝地域における民間主導の復興の取り組みの 1 つとして、A の敷地にガーデンを形成することを支援する任意団体として「雄勝花物語実行委員会」（以下、P という）を設立する。P は A や住民、地元で活動しているボランティア団体や Y 等による任意の主体の集合体であり構成員は不確定である。P はこれ以降、雄勝 CG における植栽のイベント等の主催団体となり、P に対し Y が資材や技術支援を行い、X は Y と連携して P を支援する主体となる。

②ガーデンの空間構成

2012 年 3 月に雄勝 CG では、Y が提案した「雄勝花物語第 1 章・メドウガーデン」のデザインに基づき、大規模な空間の改変が行われた。このイベントは P が主催し、ガーデンづくりの作業は、Y

及び X に加え、Z 仮設住宅の住民や非浸水エリアの近隣住民、石巻市中心部で活動しているボランティア団体、地元の高校生等が参加し、昼食の配布を行う企業等も含めて約 100 名が関わる雄勝地区で開催される大規模な復興イベントの 1 つとなった。これは後に雄勝 CG を起点として行われる雄勝の復興イベント等にも繋がってゆく。

これまで雄勝 CG では、土が調達できなかったこともあり、敷地南東部の一部のみしか植栽されていなかったが、このイベント時に Y が大規模に土をガーデンに搬入し、盛土による園路の造成、排水路の掘削が行われ、ガーデンの基盤が生成された。植栽用に盛土した場所の土留めには、雄勝産の建材である雄勝石スレートが使用された。土の運搬や園路の造成、排水路の掘削、スレートを並べる作業は植物の専門知識がなくとも実施可能であるため、当日の作業に参加したボランティアが地元の住民等と協働で実施し、全国から Y のもとに集まった支援物資の植物の種の播種は、植物に対する一定の専門知識がある X が実施した。重機操作は Y が、施工の指示は X が中心行的に行った。

このイベント時に使用した雄勝石スレートは、土留めに使用されるだけでなく、雄勝 CG の敷地の周縁部に「OGATSU」、「アイ (I) ラブ (記号) オガツ (O)」の文字を描くなど、ガーデンから外部にメッセージを発信する手段としても活用された。雄勝中心部は建物が全て流され、目印が全くない状態であったため、雄勝の入口にあたる場所に OGATSU の文字を明示することは、そこがどこであるかという場所を伝える役割も果たした。「アイラブオガツ」という表現は事前に決められたものではなく、当日参加していたボランティアや地元住民がアイデアを出して自主的に製作された。津波で雄勝石の観会館等が失われた空間に、改めて地場産の雄勝石を使用することは、雄勝 CG のアイデンティティにもなった。

③土地利用の変化

ガーデンの形成に必要な土の搬入と新たな植栽により現在の雄勝 CG の原型が形成された。植栽は地元の造園会社である Y に届けられた種子をミックスフラワーとして X が混合して播種するものと、ボランティアや住民による一年草の植栽の 2 つのパターンで行われた。支援物資の種子をミックスフラワーとして使用したのは、植栽用に新たな土の搬入を行ったが、津波により塩水を被っ

表-1 雄勝 CG の展開プロセス

区分	萌芽期	メドウガーデン期	基盤集中整備期	復興拠点形成期
時期	2011. 8-2012. 2	2012. 3-2013. 2	2013. 3-2013. 10	2013. 11-2015. 9
活動主体	A, X	A, Y, P, X, 近隣住民 ボランティア団体	A, Y, P, X, 近隣住民 ボランティア団体	Q, A, Y, X, 近隣住民 ボランティア団体
ガーデン の 空間構成	ホオズキ、フウセンカズラ チューリップ	支援物資の種子 一年草（ビオラ等）	各種バラ、ペリー類、ハーブ類、木本、多年草類、一年草類	
				
土地利用 の変化	瓦礫と雑草の撤去	土搬入、雄勝石スレート土留め、 雄勝石スレートを使用した OGATSU 等の文字	白い木柵、歩行者用園路、ガーデン ハウス、トイレ、パーゴラ、ビニ ールハウス	ブランコ、石積み、プレハブ作 業小屋
				

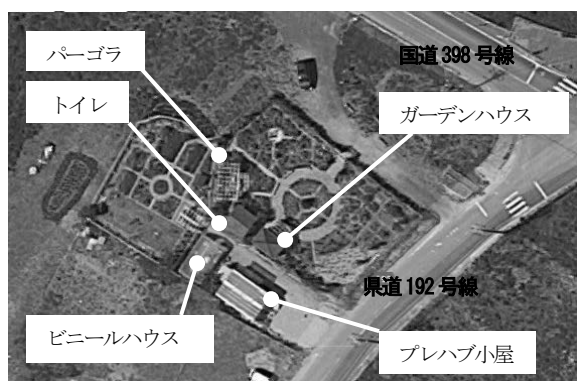


図-2 雄勝 CG の空間構成

た土壌であることや、西日本など気候の違う地域から送られてきた種子が発芽・開花しないリスクを低減するためであった。実際に、ガーデン内の雨水が流出する周縁部では播種した種子が殆ど発芽せず、Xが追加の種子の播種や追肥作業を2012年6月に行った。ビオラ等の1年草は、ボランティア団体が雄勝石の土留めに沿って植栽した。これは、播種したミックスフラワーが開花するまでの期間、ガーデンを彩るものとなった。この開墾により、雄勝CGは個人の宅地内の花植え空間から大規模ガーデンに変容した。多数のボランティア活動によって形成された雄勝CGは、個人的な用い空間から、雄勝地区の復興を支援する不特定多数の人の協働の場として公共性を帯びる空間となる。

2012年3月に播種された種子は、2012年6月頃から開花をはじめ、震災後、初めて雄勝中心部の低平地に彩ある空間が出現した。このような花と緑の空間が近隣にはなかったため、雄勝の訪問者がそこで写真を撮るなど、雄勝CGは雄勝のランドマークの1つにもなっていく。その後、地元の小学生が課外活動でヒマワリを植えたり、日常的にZ仮設住宅の住民が除草作業のために通う等、雄勝CGは地元を含めた多様な主体が植栽を通じて関わる空間になる。Aは支援物資の提供の働きかけやガーデン整備の助成金への申請を積極的に行い、Yの元にも2012年度も引き続き支援物資として全国から植物が届けられたことから、雄勝CGは植物系の支援物資を受け入れる場にもなった。支援物資の存在がボランティア作業のニーズを生み、雄勝の外部の支援者との関係を形成するなど、活動の継続にも繋がった。AはYやX、Z仮設住宅の住民やボランティア団体と協働して雄勝CG内の植栽を進めた。

(3) 基盤集中整備期：2013年3月～2013年10月

①活動主体

多数のボランティアの参加により雄勝CGが大規模なガーデン空間に変容した結果、雄勝CGは企業研修や修学旅行等のボランティア団体の受入れを始めるようになる。これは、東日本大震災の復興支援において、修学旅行や企業研修等の団体がボランティアを行うという新たな形態が生まれたことも影響している。特に半島部の被災地は人口減少や高齢化が進み衰退が懸念されることから、支援を行いたいと希望する主体は多い。しかし、急峻で狭小な道路の先に小規模集落が分散し、仮設住宅の規模も小さい集落では、実際にはボランティア団体の支援の受入が物理的に困難な場合も多い。これに対し雄勝CGは低平地に位置しているため、大型バスも乗り入れしやすく、敷地にも余裕があり、50名以上のボランティアの受け入れに十分な広さがあった。

雄勝CGにおけるボランティア団体の活動の増加に伴い、Aにはボランティアの作業の補完に加えて、ボランティア受け入れのコーディネーターとしての役割が新たに発生した。Aのきめ細かな対応により定期的に雄勝CGを訪問し、季節ごとに必要な管理に関わる団体も増加していった。こうした経緯から、日常的な管理活動はZ仮設住宅などの近隣住民が、非定期には外部のボランテ

アがCGの空間管理において労力を提供するという新しいCGの管理・運営方式が雄勝CGでは生み出された。

②ガーデンの空間構成

2013年2月に、Yより再度雄勝CGの新たな整備案として「雄勝花物語第2章・ローズガーデンファクトリープロジェクト」が提案される。これは図-2に示すように、メドウガーデン期のガーデンとは全く異なる幾何学的なフランス式庭園式の骨格を持つガーデンであり、植栽内容も支援物資や一年草によるものから、産業拠点の形成の意図も込めた「ローズファクトリーガーデン」として、専門性の高い多年草や多品種のバラやベリー類に転換するものであった。この提案に沿った空間を実現するために雄勝CGはハード面の整備に着手する。この背景にはメドウガーデン期以降のボランティアも含めた雄勝CGの来訪者の増加があり、トイレのような訪問者のための施設や、管理用具の収納場所、来訪者にこれまでの経緯を説明する活動内容の展示スペース等の必要性が高まったことがあった。また、震災から2年が経過して支援物資の提供が減少し、雄勝CGとして固有の空間整備を行ってゆく必要が出てきたという被災地を取り巻く社会状況の変化も影響している。

2013年3月に、ガーデン内の園路のレンガ舗装、シカの食害を避けるための木柵の設置が開始された。白いペンキが防腐を兼ねて塗られた木柵は、建築物が殆どない低平地において目を引く存在となった。また、パネル展示やガーデンの花でつくった小物等の販売ができるガーデンハウス、トイレ兼物置小屋、休憩用のパーゴラ、育苗用のビニールハウスが設置された。これらの作業はAや地元の住民、ボランティアやXが実施した。特に作業日程等は定めず、それぞれができる範囲で都合のつくタイミングに作業に取り組んだ。また、ガーデンハウスの屋根は東京駅の屋根に使用された雄勝石スレートと同じものを使用し、東京駅の屋根を葺く作業に関わった伝統技術を持つ職人がXやボランティアと共に作業を行った。

多数のボランティアが作業に関わるようになった雄勝CGでは、これまで土留め等に使用してきた雄勝石スレートを、現地を訪問したボランティア等が雄勝に対するメッセージを書き込むものとしても活用するようになる。このことは雄勝CGとボランティアの繋がりを可視化すると同時に、メッセージを記入した人が再度自分の足跡を見るために現地を訪問することを促す効果もあった。

③土地利用の変化

これまで支援物資が植栽の中心であったが、各種のバラやハーブ、ベリー類や木本等の植栽が実施されたことに加え、複数の施設が設置されたことが大きな土地利用の変化である。これらはAが申請した助成金や寄付金、造園会社の寄付等により賄われた。雄勝CGの中心的存在であるガーデンハウスはYが造園イベントで使用したものが再活用された。この結果、雄勝CGは植生についても専門性が高い地域の観光拠点となり得るガーデンに変容する。2013年10月には「雄勝ローズファクトリーガーデン」としてのオープニングイベントが開催され、プロの歌手によるコンサート等が行われた。イベントはPが主催し、近隣住民や仮設住宅の住民、ボランティア等、延べ約400名が参加した。その後も雄勝CGではイベントが継続的に行われ、雄勝のパブリックスペースの1つとして積極的に活用されている。

(4) 復興拠点形成期：2013年11月～2015年9月

①活動主体

基盤集中整備期に本格的なガーデン整備が行われたことを受けて、Aはこの空間の運営主体として一般社団法人（非営利型）「雄勝花物語」（以下、Qという）を2014年3月に設立する。これは、ガーデン整備に必要な各種の補助金を受ける主体として法人格が必要だったことも影響している。法人化したQは、ガーデンを基盤としたソフト面の活動の充実がはかられ、従来のガーデンの活動に該当する「被災地緑化支援・被災者支援」に加え、「防災教育・ボランティア活動の受入」で津波の記憶を継承し、雄勝の自然環

境を活かした教育の場である「雄勝環境教育センター」機能を加え、新事業である「体験教室&セミナー」を加えた4つを活動の柱として明示する。これらの活動は雄勝外部の住民と雄勝内の住民、Z仮設住宅等の雄勝内の住民と雄勝CGとの接点をつくることを目指したものであり、雄勝CGはこれらを繋ぐ場として活用された。外部との繋がりは従来のボランティアだけでなく、「防災教育」という観点から新たな増加もあった。また、雄勝内の住民との関わりではZ仮設住宅の高齢者が雄勝CGの花を使ったしおりやアクセサリー作り等の手仕事を行い、作業に関わった高齢者に対して社団法人が賃金を支払うというコミュニティビジネスも展開されるようになる。更に、雄勝CGでのイベント時には仮設店舗の弁当を使用したり、雄勝地区内で復興イベントが開催される場合に連携する等、雄勝内の他の主体との連携が進んでいった。

②ガーデンの空間構成

雄勝CG内には社団法人として受けた助成金で作業用のプレハブ小屋が建設された。これまで雄勝CGには作業可能な室内スペースがなかったため、寒さが厳しく降雪や凍土となる冬季には、活動が停滞せざるを得ない状況であった。しかし、プレハブができることで前述のように高齢者の手仕事の場所としても使用でき、室内でスクリーンを使用して防災教育を講義するなど、雄勝CGにおけるソフト面でのアクティビティが広がった。また、ガーデンの外周部に近隣で採取した石を積み設置し、ガーデンの輪郭を明確にした。更に支援者の寄付による植樹や遊具の設置がガーデン内に行われた。

③土地利用の変化

法人化した後はプレハブ小屋の建設が最も大きな空間面変化である。また法人化に伴いホームページも開設し、受領した助成金の内容等をそこで公開している¹⁰⁾。また、Qの積極的な活動でオリーブやラベンダー等の雄勝CGの新しいアイデンティティとなる植物も導入された。一方、雄勝CGの近隣の低平地にも、雄勝CGと連携して地権者が自ら植栽する場所が2箇所形成された。

3. 関係主体の認識

(1) ヒアリング対象者の概要

次に、雄勝CGの管理活動に関わる住民に対し、①雄勝CGの空間管理に関わるきっかけ、②空間管理のモチベーションを把握するために、ヒアリング調査を法人化後の2014年6月14日に実施した。当日はボランティア団体の作業を補助する形で植栽作業に参加していた住民にヒアリングを実施した。ヒアリング対象者は4名であり、このうちA、BはQの構成員、C及びDは近隣住民等である。この4名は日常的に雄勝CGの空間管理に関わっている¹³⁾。

(2) 活動のきっかけ

雄勝CGの活動は、Aの個人的な行為にXが関わることで、公共性を帯びるようになったことが契機となっている。Aは、明確に「最初は単に花が咲けば良いと考えていた」「津波で亡くなった人に見てもらいたい」と発言している。これに対し、地元のB、C、Dはそれぞれ異なる動機で活動に参加している。Bは、雄勝CGの支援に献身的に取り組むYに触発されて、雄勝CGを雄勝の復興活動の基盤とすることを検討している。Cは、雄勝CGで活動しているAを見かけ「自分に出来ることを少しでも一緒に出来たら」と考えている。Dは、別のテーマで復興の活動していることもあり、雄勝の復興のために努力している者同士として、「雄勝に対する想いをつなげ、雄勝で繋がりたい」という連携を目指している。

Aと雄勝CGの活動主体となっている住民は、全員が震災前から顔見知りであった。震災後も地元に残って復興に関わろうとしている主体が地域の活性化や復興のためという共通する目的を実現するために、相互に活動をカバーし合っている姿勢が読み取れる。

(3) 活動のモチベーション

ヒアリングから、外部の評価が活動のモチベーションになっていることが明らかになった。Aは、メディアの紹介により近隣住

民も雄勝CGの存在を知ることになったと指摘している。Cは「雄勝に残っている人と雄勝に足を運んでくれる人のために」と来訪者を明確に意識している。Dも「トンネルを出ると」と外部からの来訪者を意識しており、それが活動のモチベーションとなっている。雄勝CGがこのように周囲の評価を得やすい背景として、雄勝CGの概要で述べたように、この敷地は雄勝地区にアクセスする国道と県道の結節点にあり、住民や支援者等の多くの人が通る場所であり、人目につきやすいことが指摘できる。一方でDは活動を通じて花の魅力を感じるようになり、活動への参加により更に活動に対するモチベーションが生成されていることが把握された。

表-2 ヒアリング対象者

区分	対象	性別	雄勝CGとの関係
活動主体	A	女性	地権者
	B	男性	地元勤務者
	C	女性	近隣住民
	D	女性	近隣商業者

表-3 雄勝CG運営主体へのヒアリング¹⁴⁾

区分	ヒアリング結果
A	① 最初は単に花が咲けば良いと考えていた。それだけここに彩がなかった ・花は津波で亡くなった人に見てもらいたいと思っていた ・この場所を忘れないでいるというメッセージを伝えたい ・被災地外の人たちにここに生活があったことを伝えたい ・雄勝は消えると言われていた、それに対する反発もあった。雄勝をなくしたくないということを示したかった。
	② 見学者が多い。雄勝ローズファクトリーガーデンのオープン以降、メディアで紹介されたことがきっかけで来る人いる ・バラとチューリップが咲いて、ようやくガーデンの存在に気づいた方も多かった。近くをしょっちゅう通っていても、中がどうなっているか分からなかったようだ
	② 震災まで人に色々やって頂く経験がなかったが、衣食住を人に頼らないとできない状態になりみじめな気持ちになった ・やってもらってばかりでは立ち上がれないと思い、自分から作っていかないと自分が持たないと思ってはじめて ・自分から何かを作った人のために何かをやるのが元気になると思ったことがお年寄りの手仕事事業にも繋がっている
	① Aさんがふるさとと繋がる場所をつくりたいという願いではじめたことなので、Aさんの想いを大切にしながら雄勝の復興の活動の拠点にしていこうと考えようになった ・Y代表者の被災地に対する献身的な支援活動に胸を打たれた
B	・被災地でも本物をつくらずには、いずれ飽きられてしまう。手を抜かないで活動をする必要がある ・花は被災者の心を癒す。花を売って下さいという人が結構いる。活動の最初の時の想いはそういうものではなかった
	② 自分たちの願いもあるけれど、周囲からの願いや期待によって願いが本物になっていく。自分たちの一方的な想いだけではなく、地域の人の想いで空間が変わっていく ・空間に周囲の人の想いが詰まってくるなかで、そうか、そういったニーズがあるのかと気づいてゆく
C	① 同じ町内なのでAさんのご家族も、Eさんのお店も知っていた ・自分に出来ることを少しでも一緒に出来たらと思ってやっている
	② 震災で仕事もなくなったので、雄勝に残っている人と雄勝に足を運んでくれる人のために何かしたいと思い、時間の空いている時に草取りをしたりしている
D	・雄勝に対する想いをつなげ、雄勝で繋がりたいと考えている ・Aさんがガーデンで一人で草をとっているのを見かけて、Aさんはここで一体どうするんだと思った ① Aさんがひとりで活動を始めた時に、支所まで花が繋がったらいいなと思った。それを見るためだけでも人が来たらいいな
	② トンネルを出るとここは一体ここはどうなっているんだ、すごいね、いいね、と言ってもらえるのが嬉しい ・お墓参りに来て頂いた方などにもちょっと立ち寄って休んで頂けたらと思っている ・Aさんとは子どもの時から知り合いだった ・震災前は花とは縁のない生活をしていて、今は花の魅力を感じている。芽が出てくると嬉しい。手をかければかけただけのことが感じられる

4. 考察

以上の雄勝 CG の展開のプロセス及び関連主体の認識の分析から、雄勝 CG の生成、展開要因について空間特性及び運営形態から考察を加えたうえで、低密度な土地利用下における住民等による空間管理の可能性を検討する。

①柔軟な役割分担による協働的空間の創造

雄勝 CG の最大の特徴は、多様な主体の役割分担による協働的空間の創造だと言える。雄勝 CG には、1) 運営の軸となる A、近隣住民、公益社団法人 Q などの地元の主体、2) Y や X 等の専門性を有する外部の主体、3) 震災により全国から集まったボランティア団体の 3 つの主体が中心に関わっており、各主体はそれぞれが自己責任で活動に参加する自己完結型の活動形態をとっている。このことは、実質的に住民が殆ど存在しない低平地であっても、地元に関係のある住民が軸となり、専門家による知識・技術とボランティア団体によるマンパワーを活用することで、CG が成立し得ることを示している。被災地のボランティア活動は時間の経過に伴い緊急支援活動から日常的な活動に遷移しているが、このような被災地を取り巻く社会状況の変化に対しても、雄勝 CG は運営主体を個人から任意団体、更に公益社団法人と柔軟に変化させることで、専門家やボランティアの力を継続的に活用しながら、ハード整備からコミュニティ事業や防災教育等のソフトへ活動内容を展開し、活動の持続性を確保していた。

②CG に対する土地利用規制と空間規模の整合性

雄勝 CG の敷地周辺一帯は災害危険区域に指定されており、居住系の用途は制限されている。しかし、従前住宅地であったエリアは工業や農業等の土地利用に供するには敷地規模が小さく土地が個々の地権者に細分化されているため、将来の土地利用をすぐに決めることは困難である。これに対し CG は施設や機器が必要なく少ない投資で始められるため、土地利用の方向性が定まるまでの暫定的土地利用に適している。また、低平地は日照を遮るものが殆どなく、土壌改良ができれば緑地空間としては条件が良い。雄勝 CG の敷地面積は宅地にはやや広い 2000 m²で、街区公園に近い規模であった。これは公園愛護会の実績からも住民グループによる管理に比較的適している規模であるが、個人で管理するには広すぎることから、近隣住民は A の作業を手伝う必要性を感じ、ボランティアに作業のニーズを提供することになった。更に国道・県道が交わる基盤の条件が良い低平地は、ボランティア団体の訪問も容易であった。このように雄勝 CG では、土地利用規制や敷地規模・土地の条件が、結果的に CG としての土地利用に整合性が高く、スムーズな土地利用につながったと言える。

③高い可視性と活動の透明性の担保

一般に CG の活動は屋外で行われるため、A やボランティア団体の作業の様子や雄勝 CG の空間変化の状況は、常時、誰でも見ることが可能であった。このような活動の可視性や透明性の高さは空間の公共性の確保に不可欠である。更に雄勝 CG は人の活動が少ない低平地で展開されたことから、相対的にその活動や成果の可視性が高く、空間の公共性が自然と担保されていたと考えられる。また、このような可視性の高さは、A の作業姿を見かけた近隣住民が管理主体に加わったり、雄勝 CG における活動成果の外部評価にも繋がり、それが更に活動への参加モチベーションになるという好循環をもたらしていた。雄勝 CG の空間や作業の可視性の高さは活動の公共性を担保し、人々の関心を確保する有利な条件として機能した。

④多様な主体の行為の蓄積による柔軟な空間構成

雄勝 CG には多様な要素が多層的に積み重なった固有の空間が形成されていた。ガーデン空間の骨格は Y によるフランス庭園式の幾何学デザインであるが、その上部を構成する要素は多様性に富んでいた。まず植栽は、専門性の高い多年草や多品種のバラだけでなく、実がなるベリー類や、誰もが知っているチューリップやビオラ等の一年草も植栽されていた。施設のうち中心となるガ

ーデンハウスは東京駅と同じ雄勝石のスレート葺きで、トイレ、パーゴラや鹿除けの白い木の柵は、ガーデンハウスと色彩やデザインが調和したものとなっている。しかし、デザインされていない育苗用のビニールハウスやプレハブ小屋も設置されている。一方、地場産の雄勝石は雄勝のアイデンティティを示すものとして、ガーデンハウスの屋根材、ガーデンの土留め、メッセージ板等に使用され、「OGATSU」という文字等もスレートでガーデンに描かれた。ガーデンの外周の土留めはボランティアによる石積みが施された。更に、ローズやベリー類とは別に Q が助成を受けたオリーブやラベンダーが新たに植栽された。このように住民と専門家、ボランティアの行為の蓄積の集合体が雄勝 CG となっており、空間デザインの骨格以外が動的で常に変化することが、空間の魅力や多様性の源泉にもなっていた。

⑤連携の場の創造と提供

雄勝 CG は、様々な主体の連携の場としての機能を提供する役割を果たしていた。ガーデンの作業を通じて雄勝外のボランティアと雄勝の住民が、ガーデンの押し花加工作業を通じて Z 仮設住宅などの雄勝の住民と雄勝 CG が、管理作業で近隣住民が、イベントやボランティアの食事の提供等で仮設商店が、雄勝 CG を介して繋がっていた。これらはいずれも雄勝 CG という場がなくては成立しない連携であり、場が多様な主体の連携を生み出したと言える。

最後に、このような被災地の CG が低密度な空間の管理にどのような示唆を与えるか考察する。日常的な軽易な作業や管理を地元に関係が深い住民が行い、大規模な開墾や力作業は定期的にボランティアが行い、空間デザインや植栽の選定、運用形態は専門家が支援するという雄勝 CG 方式は、地元のマンパワーが限られている場合でも、外部との連携により緑地空間の創造・管理が可能であることを示している。雄勝 CG では、低平地に密度の濃い緑地空間が形成されることにより、これが拠点となりソフト事業に展開してゆくプロセスが確認された。震災から 5 年が経過した現在、雄勝 CG を訪問するボランティアが緊急支援から日常的な支援に変容しても継続しているのは、様々な人や活動の結節点としての「場」である CG が存在するからであるとも言える。震災という特殊な事情もあり、今後の持続性については現時点では判断できないが、密度の高い緑地空間が人口減少社会において低密化した地域を支えてゆく可能性もあることを雄勝 CG は示唆している。

謝辞：本研究は JSPS 科研費 25340137 の助成を受けたものです。

参考文献及び補注

- 1) 例えば本研究の対象地である石巻市雄勝地区の土地利用構想図は 2016 年 2 月時点でも土地利用のゾーニングがなく抽象的なままである。
- 2) 吉矢理恵子・川村幸男・島田裕司 (2007)「まちづくりと街路・街路整備におけるアドプト制度」都市と交通(69), 11-13
- 3) 金子忠一・内山正雄(1983)「都市公園の管理体制についての研究—特に、公園愛護会の発祥と現状の調査分析」, 造園雑誌 No.46 (5), 99-104
- 4) 越川秀治 (2002)「コミュニティガーデン—市民が進める緑のまちづくり」学芸出版社
- 5) 渡部陽介他 (2014)「カシニワ制度に基づくコミュニティガーデンにおける公共性の変化」ランドスケープ研究 No. 77 (5), 713-718
- 6) 平田富士男他 (2003)「サンフランシスコ市のコミュニティガーデンの実態とガーデンコーディネーターの役割」都市計画論文集 38 (3), 751-756
- 7) 秋田典子 (2014)「コミュニティガーデン方式による土地利用管理手法の検討」, 日本建築学会技術報告集, 20 (45), 727-7308
- 8) 例えば GreenFields「the Gardens of IHATOV」2014 等に紹介されている
- 9) 2015 年 7 月 31 日に雄勝総合支所で実施したヒアリング資料に基づく
- 10) 地理院地図 (電子国土 web) を引用し筆者が加筆
- 11) 雄勝ローズファクトリーガーデンホームページ (<http://ogatsu-flowerstory.com/>)
- 12) Google Map による航空写真に加筆
- 13) A より雄勝 CG の中心的活動者として紹介を受けた 4 名である。低平地は活動主体が少なく個人が特定しやすいため、本論に大きく影響しない年齢等は明記せず、関係についても抽象的な描写に留めた。
- 14) 下線部は筆者による。個人が特定できる内容は、発言意図を変更しない範囲で抽象的な表現に改めた。